

多様性を包摂する社会の実現に向けて  
CLD児童生徒に関わる「おとな」や「組織」ができることは何か？

企画者:三好 大(帝京科学大学)  
共同企画者:村上 知里(関西大学)

(1)交流会で話したいテーマ

本セッションでは、「多様性を包摂する社会の実現に向けてCLD児童生徒に関わる「おとな」や「組織」ができることは何か？」というテーマを掲げます。近年、SNSでの投稿やマスメディアの報道を通して「外国人」に対する差別や偏見を助長するような言説が急激なスピードで増加しています。加えて、世界情勢が混迷を迎える中、日本に在留するCLD児童生徒の来日背景も非常に多様化しており、その属性による差別や偏見に晒されるリスクが増大しています。このような現状にあって、日本社会全体が、CLD児童生徒へ心理的安全と全人的な発達を保障し日本社会への包摂を推し進めるとともに、すべての人が相互理解の上に包摂される社会の形成が急務です。そこで、CLD児童生徒に関わる教師や支援者をはじめとする社会的な責任を持つ「おとな」たち、学校やNPO団体等の「組織」が組織の内部はさることながら、広く社会に向けて働きかけていくことが求められているのではないでしょうか。本セッションを通してこれまで参加者のみなさまが多様性を包摂する社会を実現するために取り組んできた経験を共有し、その担い手として、私たち一人一人が「おとな」として、あるいは、「組織」としてどのような行動を起こせるのか考えます。このことにより、CLD児童生徒のもつ能力や経験が尊重され、それを発揮される場が保障される「多様性が包摂される社会」の実現を目指します。

(2)「参加者への呼びかけ」

・参加して欲しい方々

本テーマに関心のある方を広く参加を募ります。この交流会を通して、自分が、あるいは、ここに集った人たちと協働して、自分に関わるCLD児童生徒だけでなく、自分の所属する組織や社会に向けてどのようなアクションができるか、一人ひとりが考えるきっかけにしたいと考えています。

・欲しい意見、共有したい悩みなど

当日は、共有したい悩みに挙げたような具体的な課題を契機として参加者にみなさまとの対話を通して「おとな」や「組織」でのどのような行動によって、CLD児童生徒の社会的包摂が実現されるのかを検討したいと思います。

【共有したい悩み例1】CLD児童生徒の「声」を聴かれ、表明する場をどう作るか

＜問題意識＞CLD児童生徒は言語の壁だけでなく文化の差異や知識の不足によって、困難が認識できない、あるいは、対処法が分からないということがあります。この背景には、CLD児童生徒への言語教育・学習支援を担う「おとな」も声が挙げづらく、その意見や経験が学校運営に十分に反映されていないということが挙げられます。改めて、子どもの心理的安全を守るために、当事者である子どもの目線から社会の在り方を考えることが求められています。

【共有したい悩み例2】CLD児童生徒を取り巻く人々や環境にどのように働きかけるのか

＜問題意識＞学校ではCLD児童生徒に対する受け入れ態勢の構築に関して、異文化理解が重視される傾向があります。そのため、CLD児童生徒以外の生徒への働きかけが十分でなく、社会的包摂につながっていかない現状があります。例えば、高等学校では、日本国籍を持つCLD生徒を含む18歳以上のすべての生徒は選挙権を持ちますが、「外国人」に関する政策を投票行動の指標の1つとして捉えるための働きかけはあまり行われていないのではないのでしょうか。加えて、差別や偏見に基づく言動をさせない、見聞きしてしまった場合にどう対応するか、という点も検討を要する課題です。